

旧最高裁判所

生涯を通していくら些細な事であっても裁判所にお世話になりたくない。争うことも争われることも嫌いだ。裁判沙汰になるようなことは一切しないよう努力してきた。それは誰もがそう思うところであろう。

シンガポールの玄関口ともいえる中心地に国会議事堂や市庁舎など重要建物がかたまっで建てられていた。なかでもセントアンドリュースロードにある一際は目を見張る緑のドームの屋根。そしてコリント様式の円柱が並ぶ西洋建築があった。これはイギリスの植民地だった1939年にイタリア人建築家によって建てられ2005年まで使われていた最高裁判所であった。実に見事な重量感のある建物でしばし見とれてしまった。



ここは第二次世界大戦終了時に日本軍が英国軍に対して降伏調印を行った場所でもある。戦争中にシンガポールで日本軍の捕虜となったイギリス軍人たちは腐った豆を食わされたと不満を漏らした。日本では納豆は朝食として毎日のように食卓に乗る定番食品だ。健康的にも大事な食品である。しかし見た目からすると糸を引き発酵させた豆は臭いもあって、まるで残飯でしか見えなかったようだ。決して腐ったものを捕虜に食わせたのではなく、食文化の違いからの誤解であったことが日本人からすると良く分かる。

ある有名な小説の書き出しに「平和ほど、尊きものはない。平和ほど、幸福なものはない。平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」とある。戦争のない、争いのない平和な社会こそ我々人類の願いである。裁判所と聞くだけで争いごとの無い社会であってほしいと願うものである。

撮影 2014 年秋

